



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

シリア：ジュネーブ国際会議開催（1）

1月22日、スイスのモントルーでシリア問題の政治的解決を模索する国際会議が開催される。米国のケリー国務長官、ロシアのラブロフ外相、シリア政府代表団などは21日に現地に到着している。今回は約40の国・機関が参加する。22日の会合終了後、24日からジュネーブで協議が継続される。ロシア代表団筋の話として、24日からのシリア政府と反体制派代表の協議は1週間から10日続き、一旦休会した後、再度協議を継続すると報道されている。シリア国民連合は、反体制派代表として会議に参加する予定である。同連合が会議に出てくれば、シリア政府と反体制派代表が初めて公式の協議に参加することになる。今回の会合に関しては、両者が協議を開始することが最大の焦点であり、一部地域での停戦あるいは人道支援の実施について合意が成立すれば上出来だろう。

国連安保理は、シリア問題に関して機能していない。そのためシリア問題の政治的解決を模索するメカニズムが存在しない状況が続いている。今回国際会議が開催されることで、今後シリア政府と反体制派代表が継続的に協議できる仕組みが定着するかが一つの焦点だろう。ただ反体制派は依然まとまりを欠いている。シリア国民連合が会議参加を決めたのは会議の4日前の18日である。同決定後、会議参加に反対するシリア国民評議会が同連合から離脱すると発表している。会議では、アルカーイダ系のイスラーム過激派が議題になるかもしれない。イスラーム過激派勢力は、シリア政府と世俗・穏健イスラーム派の反体制派にとっては共通の敵である。欧米諸国、ロシアは、シリアで戦闘経験を積んだイスラーム過激派の活動家が自国に戻ってテロを行うことを懸念している。同過激派は中東にある今の国境線を認めていない。シリア内戦に対する立場が異なる域内諸国も、大半の国は、イスラーム過激派に対する脅威を共有している。

19日、国連の潘事務総長がイランを含む10カ国に追加の招待状を送り、翌20日イランへの招待を取り消した。国連側は、イランが会議参加の前提条件である2012年の1回目のジュネーブ国際会議コミュニケの受け入れを明確にしなかったためとした。イラン側は、国連事務総長が、イランの参加を望まない勢力の政治的圧力に屈したためと批判した。イランの会議参加をめぐる混乱は、ジュネーブ国際会議に誰が参加するかも、シリア問題の一部であることを示している。

（中島主席研究員）